

二学期制試行初年度の成果と課題

丸 野 讓 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Initial Challenges and Results of a Two Semester Academic Year

MARUNO Izuru

キーワード：学校づくり，ゆとりある学校生活，二学期制，学びの連続性，個に応じたきめ細かな指導

I 二学期制導入の背景とねらい

1 二学期制導入の背景

(1) 新学習指導要領の理念

今回の学習指導要領改訂において、「生きる力」をはぐくむという理念は継承され、確かな学力、豊かな心、健やかな体を調和的に育成することが重視された。

具体的には、知識・技能の習得とこれを活用して思考力・判断力・表現力等を育成すること、道徳の時間を要として道徳教育を充実すること、体力向上や心身の健康の保持増進等の指導を充実することが求められている。

それに伴い、国語、社会、算数、理科及び体育の授業時数が増加するなど、学校週5日制の枠組は基本的に堅持される中での学習内容や授業時数の増加への対応を迫られている。

(2) 本校の新たな学校づくりの取組

本校では昨年から、新学習指導要領の理念を具現化するために、様々な角度から本校の教育課題を分析して明らかにした上で学校教育目標を設定し、新たな学校づくりの取組を始めた。

その中で、わたしたちは目指す学校・学級・教師の姿として、「多様な体験活動の充実」「一人一人の子どもよさの発揮」「子どもと教師の触れ合いの重視」などを取組の指針として共有することにした。

これらの指針に則した教育活動を実現するためには、時間的・心的なゆとりを保ちながら、個に応じた指導の充実や教師と子どもがしっかり向き合う教育環境を整えることが不可欠であると考えた。

また、本校は、小学校教育に関する理論的・実践的研究を先導的に行いその成果を公開する、学部学生の実習の指導を行うなど、教育学部附

属学校としての使命がある。これらは、毎年、子どもたちに対する教育活動と併行して行っているが、常々もっとじっくりと子どもを学習に取り組みせたいという課題も抱いており、従来の三学期制の枠組を見直す必要も感じていた。

(3) 二学期制導入の動向

全国の小学校で、二学期制を導入している学校は20%程度とみられ、増加傾向にある。これらの学校では、二学期制導入で期待する効果または取組の成果として次のような点を挙げている。

- ・ 教職員の発想の転換、意識改革につながり、学校の教育活動を見直す契機となる。
- ・ 学期の期間が長くなり、子どもの長期的変容が把握でき、指導と評価の一体化が図れる。
- ・ 学校行事等の見直しにより、授業時数が確保できる。
- ・ 長期休業を生かした継続した学習が可能となる。

二学期制の導入に当たっては対応すべき課題も想定されるが、先行導入校での二学期制が円滑な教育活動を行う上で重大な阻害要件となっているという事例はなく一定の効果が期待できると考える。

2 二学期制導入のねらい

本研究論文の緒論で述べてあるとおり、わたしたちは、新しい学校づくりの実現に向けて、カリキュラム創造の枠組として二学期制の導入は重要な要件であると考えた。そこで、二学期制導入のねらいを次の三点に設定した。

(1) ゆとりある教育活動の展開による学習活動や体験活動の充実

ゆとりある教育活動を実現する重要な条件は、

授業時数の確保である。二学期制導入に伴い、次のような方法で授業時数の増加を図ることにしたい。

- ・ 夏季休業の短縮と秋季休業の設定の相殺効果による授業日数増加
- ・ 始業式・終業式の回数減による授業時数増加
- ・ 週当たりの時間割見直しによる授業時数増加

以上のような時間のゆとりを生み出すことにより、従前どおりの体験活動を充実させたり、長期休業前の慌ただしさを軽減したりなど、心的ゆとりも生まれ子どもと教師がじっくり向き合った教育活動が展開できると考える。



【写真1 5年自然教室】

(2) 「学びの連続性」の確保

二学期制の特徴は、一つの学期の長期化と学期の途中に長期休業が入ることである。これを利点として、「学びの連続性」を次のように確保したいと考える。



【写真2 親子標本づくり講習会】

ア 長期的な展望に立った指導と評価

二学期制では、前期・後期ともに約100日程度

の授業日数となる。学期の期間が長くなることで、試行・体験・挑戦・反復等の学習を充実させたり、指導と評価の一体化に努めて子どもの長期的な変容を把握したりするなど、信頼性・客観性のある指導と評価が期待できる。

イ 長期休業の活用を図った学びの連続

二学期制では、学期の途中に長期休業を挟むことになる。従って、長期休業前後の学習と長期休業中の体験活動等との接続を図るような指導計画を工夫し、追究活動に深まりをもたせるようにする。

(3) 個に応じたきめ細かな指導の充実

二学期制では、前・後期ごとに長期に及ぶまとまった学習内容が完結することになる。そこで、授業においては、一人一人の子どもに応じた学習状況（学習態度、ノート、レポート、作品、小テスト等）を十分に見取りながら、個に応じたきめ細かな指導を行うようにしたい。

また、通知表の回数は減ることになるが、通知表の様式・内容の工夫・改善を行ったり、家庭訪問の時期や内容の工夫や教育相談の充実等を行ったりするなど、これまで以上にきめ細かなフィードバックを行い、子どもや保護者の不安感の払拭に努める。

II 二学期制の概要

1 二学期制の枠組

平成21年度から二学期制の導入により、各学期の枠組を図1のように変更した。

【三学期制】	一学期				二学期				三学期			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	始業式・入学式 春季休業			終業式	夏季休業	始業式			終業式	冬季休業	始業式	卒業式・修了式 春季休業

【二学期制】	前期					後期						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	始業式・入学式 春季休業				夏季休業	終業式	秋季休業	始業式		冬季休業		卒業式・修了式 春季休業

【図1 三学期制と二学期制の枠組の比較】

- 学期の期間
 - ・前期……4月1日から10月上旬まで（授業日数約100日）
 - ・後期……10月中旬から3月31日まで（授業日数約100日）
 - 長期休業
 - ・夏季休業……7月21日から約5週間（9月初頭開始の教育実習準備への対応）
 - ・秋季休業……前期終了翌日から週休日を含む5日間（リフレッシュ期間）
 - ・冬季休業……12月25日から1月7日まで
 - 始業式・終業式（計4回）
 - ・始業式（前期開始時・後期開始時）、終業式（前期終了時・後期終了時）
 - ・夏季休業前後の終・始業式と冬季休業前後の終・始業式は削減
 - その他
 - ・家庭訪問……夏季休業開始直後の7月中に実施
- ・教育相談……冬季休業前に全保護者を対象として実施

2 二学期制の実際

(1) 授業日数・授業時数

授業日数については、夏季休業日の1週間短縮と秋季休業日5日間（週休日以外は2日間程度）設定による相殺効果により、三学期制の例年より授業日数は2～3日間増加する。

授業時数については、始業式・終業式のある始業日・終業日が1日ずつ減少すること、また始業日・終業日における授業も4～6限まで授業を行うことなどにより、三学期制の例年より20時間程度増加となる。

(2) 学校行事等

二学期制の導入により実施時期を見直したり、新たに実施したりした学校行事等は、表1のとおりである。

【表1 二学期制導入に伴い変更した学校行事等】

行事等の名称		時期等の変更	変更の理由等
校内水泳大会		7月第2週から第3週へ変更	実施日を遅らせることで、技能等の確かな習得を図るため。
運動会		実施時期の変更はないが、夏季休業の1週間短縮により練習・準備開始を早める	練習や準備に充てる実時間数は増やさないが、教育実習期間との重なりや天候への対応等を考慮して、運動会へゆとりをもって取り組むため。
教育実習	職員との対面式・オリエンテーション	8月下旬に新たに実施	担任との打ち合せ等を事前に行うことで、実習生の意欲を高め、見通しをもたせるため。
	主免教育実習	例年より1週間早め、9月初めから10月初めにかけて実施	教育実習終了後から秋季休業までに1週間を確保し、学期のまとめを行うため。
全校朝会		長期休業の直前、直後に実施	長期休業の事前・事後指導の一環として、また気分を刷新を図るため。
チャレンジタイム（児童会活動）		11月下旬に新たに実施	異年齢集団における活動の設定により人間関係をよりよく築く力を高めるため。

(3) 学びの連続性

ア 学期の長期化を生かした学びの連続性

二学期制の大きな特徴は、前期・後期とも授業日が100日程度の長期に及ぶということである。

従って、学期の長期化に伴い、「学びの連続性」を確保し充実するという視点で、次のような工夫・改善すべき点が明らかになった。

○ 単元・題材配列の工夫

教科等の年間指導計画は、従来の三学期制の区切りごとに完結していた単元・題材配列から、学習内容の系統性は考慮した上で学期の長期化に対応した配列を検討する必要がある。

○ 学習指導の充実

探究的な課題解決学習を展開する過程で、習得と活用の学習活動を往還させたり、また試行・体験・挑戦・反復等の具体的な活動を十分に取入れたりなど、学びの連続性を意図した個に応じたきめ細かな学習指導を充実する必要がある。

さらに、長期休業前は、集中的な評価や成績処理が軽減されることにより、休業直前まで子どもにしっかり向き合う授業を行い学習指導の充実も期待できる。

○ 子どもの長期的変容の把握

学期の長期化は、子どもの変容の様子を把握する上で好期である。従って、指導と評価の一体化を促進し、長期にわたる連続的な学びの過程を把握することが必要である。

これに伴い、評価テストの時期・内容を見直したり、通知表の様式・内容も工夫・改善する必要がある。

イ 長期休業を生かした「学びの連続性」

学期の途中に長期休業があることを学びの分断ととらえるのではなく、長期休業中の活動を生かした学びの連続を積極的に進めていく必要がある。

つまり、【長期休業前の学習】【長期休業中の活動】【長期休業後の学習】の三つの関係の接続を積極的に図っていくということである。

そのためには、次のような点を配慮していくことにする。

○ 単元・題材配列の工夫

年間指導計画では、長期休業中の子どもの活動を想定しながら、長期休業前及び長期休業後の単元・題材配列を工夫する。

○ 長期休業中の子どもの学習課題等の明確化

個々の子どもが取り組む具体的な課題等については、個に応じた活動の計画が立てられるように事前の指導を充実する。

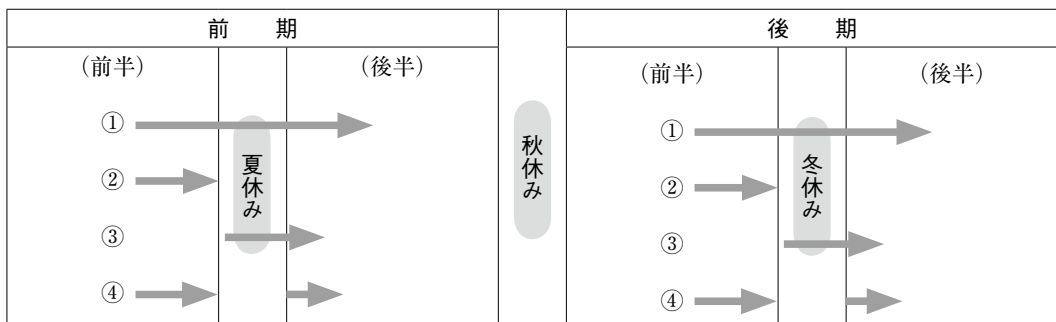
○ 長期休業中の指導の充実

長期休業中の子どもの活動には、休業中であっても必要に応じて適宜相談に応じたり、アドバイスをしたりなどの指導を行う必要がある。

○ 保護者との連携

長期休業中の子どもの諸活動は、保護者の協力なしには充実しない。そこで、個々の子どもの休業中の課題等を明確にした上で、保護者にも積極的にかかわってもらよう協力を求める必要がある。

そこで、【長期休業前の学習】【長期休業中の活動】【長期休業後の学習】のつながりを次のようなパターンで分類し、学びの連続を実現したいと考えた。



① (前半) → (長期休み中の活動) → (後半) に関連をもたせた。

【国語科】 夏季休業中の読書活動に生かせるように、夏季休業前に読書単元を位置付けた。また、夏季休業中は、作文相談日を設定し、題材の選定、取材構成の仕方などについて指導を行うようにした。

【社会科】 3～6年に自由研究指導を夏季休業前に行うとともに、夏季休業中には自由研究相談日を設け充実を図る。

【理科】 前期前半の終り頃に自由研究指導「自由研究に挑戦しよう」を3～6年に位置づけ、前期後半初めに研究したことの発表会を位置付けた。夏季休業中は、「自由研究相談日」を4日設定し、指導を行うようにした。

【音楽科】 3年のリコーダーを扱う題材を前期前半末に設定するとともに、夏季休業中にリコーダーチャレンジ表を取り組むことができるようにし、前期後半初めに習熟を図った状態で合奏ができるようにした。

【家庭科】 夏季休業を利用して学習を生かした整理整頓や大掃除をし、その中で生じた課題をもとに発展的な学習につなげられるように、夏季休業をまたいで前後に題材「気持ちよく生活しようⅠ～すっきりびかびか大作戦～」を設定した。

②（前半）→（長期休み中の活動）に関連をもたせた。

【算数科】 2・3・4年生でこれまでも同様の配列ではあったが、夏季休業前に左のような題材を位置付け、資料を表やグラフにまとめるよさ、まとめるとおもしろそうな素材などについて「統計グラフコンクール」と関連付けて紹介する。また、全校の子どもを対象に「統計グラフコンクール」への参加募集を呼びかけ、希望者には夏季休業前に指導を行った。

【生活科】 冬季休業中に、家庭での実践が継続できるように、冬季休業前に単元「かぞく大すき大さくせん」を位置付けた。また、冬季休業の課題帳にも進んで実践できるようにワークシートの挿入を行って

いく。冬季休業終了後の発表会も視野に入れている。

③（長期休み中の活動）→（後半）に関連をもたせた。

【図画工作科】 秋季休業中に自然の中から材料を集め、後期の学習に生かす。

【外国語活動】 夏季休業を利用して、外国に関する調べ学習や外国の方と接する機会設定への意欲が高められるように、夏季休業前に6年「外国に出かけよう」を位置付けた。

④（前半）→（後半）に関連をもたせた。

【体育科】 表現リズム遊び、表現運動を夏季休業の前後に位置付けた。（7月の評価作業が軽減され、夏季休業明けにその評価ができるため）

【生活科】 朝顔の栽培・観察を夏季休業中に継続観察できるように位置付けた。これまでより充実を図るために、ワークシートの工夫・夏季休業の課題帳への記録用紙の挿入等を行っていく。

⑤その他

【理科】 3年「草花を育てよう(1)」と3年「チョウを育てよう」を同時進行で扱うように、前期前半に並列的に配置した。（どちらも長期的な観察を要するため）

【社会科】 小単元「鹿児島市大発見」を改訂を機に内容を見直し、時数を削減した。そうすることで精選した内容にしぼるとともに、夏季休業前でのゆとりをもたせることができた。

【外国語活動】 年間を通じて、季節の変容を感じ、そこに必要な英語に慣れ親しませるために、「春をさがそう」と「秋をさがそう」を設定した。実際に大学に出かけ、木の葉など具体物と英語を対応させながら楽しく発話させるよう工夫した。

以上のような二学期のよさを生かした学びの連続性を図る単元・題材設定を、各教科等で検討をしていく。

(4) 保護者への対応

ア 二学期制の周知

これまで長い間慣れ親しんできた三学期制から二学期制への転換については、その趣旨や概要についての周知を図り、子どもや保護者の戸惑いを払拭する必要がある。

そこで、保護者に対しては試行の前年から学年PTA等の場を活用して説明し、理解と協力を求めた。

イ 通知表

二学期制では、通知表の回数が減ることによる学習状況把握や学力低下等への保護者の懸念が予想される。そこで、通知表の内容についても、長期にわたる学習・生活状況を確かに伝えられるように様式・内容の工夫改善を図った。

また、わたしたちは、これまで通知表という紙面を通して子どもの学習・生活状況の説明を行ってきたが、二学期制を契機として教師と保護者が直接語り合う場も大事にしていきたいと考えている。

ウ 家庭訪問

これまで、本校では家庭訪問を夏季休業中に実施していた。そこで、二学期制導入に当たっては、その利点を生かし、前期前半の子どもの学習や生活の様子を子どもの自己評価も活用しながら保護者に説明するとともに、夏季休業中の過ごし方等についても話し合うことにした。

そのため、家庭訪問期間を夏季休業開始直後に約10日間設定するとともに、訪問時間も若干増やし具体的な説明ができるようにした。

エ 教育相談

冬季休業前には、後期前半の子どもの様子を説明し、冬季休業さらに後期後半の過ごし方等について話し合うために、全保護者を対象に教育相談を実施した。

これも、放課後等の時間を利用しての面談となるため、約20日間の期間を設定し個別の面談時間が確保できるようにした。

オ 二学期制の評価

二学期制の導入に当たり、平成21年度～22年度は試行という位置付けをしている。従って、2年間の試行期間の検証については、保護者からの意

見も求めて二学期制の評価を行い、よりよい二学期制の在り方について検討していくことにした。

(5) 運用上の留意事項

二学期制の導入に当たっては、教育学部の理解の下、附属中学校とも連携を図り、平成21年度から同時に導入することができた。

また、県内の小中学校では初めての二学期制導入になることもあり、県教育委員会及び鹿児島市教育委員会にも導入のねらいや概要について説明し理解をいただいた。

さらに、多くの人々の関心も寄せられており、マスコミ各社からの取材に対しても随時適切に対応するようにしている。

Ⅲ 二学期制の評価

子ども、保護者、教職員の三者を対象に評価を行うこととした。また、評価時期は、年度内においてPDCAサイクルが機能化するように、前期終了後に実施することで、結果を基にした課題を後期に生かしていけるようにした。なお、年度末にも年間の総括評価としてのアンケートを実施し、次年度に生かすことにしている。

《子ども》…2年生以上を対象に、秋季休業明けに各学級で実施
 《保護者》…2年生以上の保護者を対象に、秋季休業前にアンケート用紙を配布し、秋季休業明けに回収
 《教職員》…教職員を対象に、秋季休業中に実施

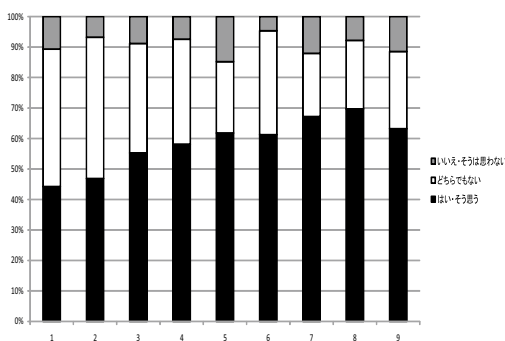
以下は、前期終了後に実施した評価の観点と質問項目及び結果である。なお、グラフの横軸は、質問項目の番号と対応している。

1 子ども

○例年よりも夏季休業中の家庭生活や家庭学習が充実できた。また、夏季休業短縮も前期後半の学校行事などの準備に向けて効果的だったようである。

●7月期は、ゆとりある学校生活、学習の充実を目指したが、それを実感としてとらえている子

番号	観 点	質 問 項 目
1	7月の学校生活	7月は、いつもの年よりゆっくりとした気持ちで学校生活を過ごすことができた。
2	7月の学習状況	7月の授業は、いつもの年よりじっくりと学習に取り組むことができた。
3	教育相談	夏休み前の教育相談は、先生になやみを話したり夏休みの過ごし方を聞いたりするなど、役に立った。
4	夏季休業の計画	夏休みの学習計画は、7月までの学習のことを考えて立てることができた。
5	通知表	夏休み前に「あゆみ」(通知表)はもらわなかったが、自分の学習の様子や学校生活について心配や不安なことはなかった。
6	家庭訪問	家庭訪問では、4月から7月までの自分の学習の様子が分かり、夏休みの過ごし方を考える上で役に立った。
7	夏季休業の過ごし方	夏休みは少し短くなったが、いつもの年と同じように家での生活を楽しく過ごし、学習にもしっかり取り組むことができた。
8	運動会・教育実習	夏休みが1週間早く終わったことで、運動会練習にじっくりととりくんだり、教生先生を迎える心構えをつくったりすることができた。
9	秋季休業	秋休みは、前期から後期への気持ちを切り替えるためのよい期間となった。

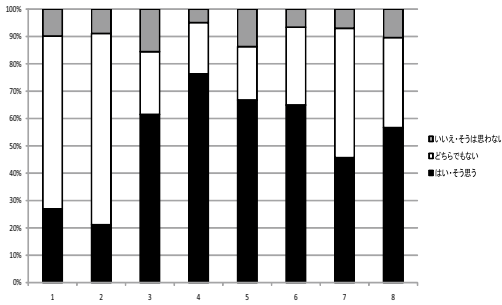


どもは少ない。学習の振り返りや夏季休業に向けた取組等を工夫し、有意義な時期になるようにする必要がある。

2 保護者

- 夏季休業前に通知表がないことへの不安は、家庭訪問の充実により払拭できたと考える。また、夏季休業の短縮も学校行事の充実につながったとの評価であった。
- 子どもと同様に、7月期のゆとりと充実を目

番号	観 点	質 問 項 目
1	7月の学校生活	子どもは、7月の学校生活をいつもの年よりゆっくりとした気持ちで過ごすことができていた。
2	7月の学習状況	子どもは、7月の学習にいつもの年よりじっくりと取り組むことができていた。
3	通知表	夏休み前に通知表はもらわなかったが、子どもの学習の様子や学校生活について心配や不安はなかった。
4	家庭訪問	これまでより家庭訪問の時間を長く設定したことで、4月から7月までの子どもの学習や学校生活の様子がよく分かり、夏休みの過ごし方を考える上で家庭訪問が役に立った。
5	夏季休業の過ごし方	夏休みが少し短くなったが、子どもは、例年と同じように充実した夏休みを過ごすことができていた。
6	運動会・教育実習	夏休みが1週間早く終わったことで、子どもは、運動会練習や教育実習等にゆとりをもって取り組んでいた。
7	前期末の子どもの様子	前期末は運動会や教育実習が終わり、子どもは学習のまとめにじっくりと取り組み、落ち着いた生活ができていた。
8	秋季休業	秋休みは、前期から後期への気分転換を図るよい期間となっていた。

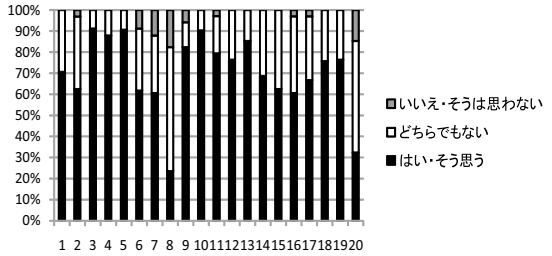


指した学校生活には不十分との評価であった。

3 教職員

アンケート項目 1～10は教職員自身に関する内容、11～20は教職員から見た子どもの様子に関する内容である。

- 例年よりも夏季休業前の繁忙度が緩和され、夏季休業を生かした学びの連続性のある学習指導や夏季休業の過ごし方の個別指導、長期的な展望に立った指導と評価の一体化などで充実が図られた。
- 夏季休業後の前期後半の学習活動の充実が課題である。運動会、教育実習との兼ね合いや夏季休業を生かした通知表の準備など改善を図る



番号	観 点	質 問 項 目
1	7月の授業の充実度	例年より夏休み前まで充実した学習活動ができたか。
2	教育相談	夏休み前の教育相談は、例年よりゆとりをもって行うことができた。
3	7月の業務の繁忙の度合い	7月の業務の繁忙の度合いは、例年より緩和された。
4	学びの連続性を意識した指導	7月までの学習と関連付けた夏休みの学習計画を立てさせることを意識した指導を行った。
5	家庭訪問	家庭訪問では、4月から7月までの生活や学習状況の説明を充実させ、夏休みの過ごし方を考えさせるように努めた。
6	夏季休業	夏休みは、通知表等の準備を行ったり、前期後半に向けた準備をしたりするなど、学期途中の長期休業のよさを生かすことができた。
7	運動会・教育実習	夏休みが1週間早く終わったことで、運動会練習や教育実習生の受け入れにゆとりをもつことができた。
8	前期末の授業の充実度	運動会や教育実習を終えて迎えた前期末は、例年の学期末より充実させることができた。
9	秋季休業	秋休みは、前期から後期への心機一転を図るために効果的であった。
10	一つの学期の長期化	一つの学期がこれまでより長くなったことで、学習指導において指導と評価の一体化をより一層図ることができた。
11		一つの学期がこれまでより長くなったことで、より一層子どもを見つめ、長期的な展望に立った生徒指導を行うことができた。
12	7月の授業の充実度	子どもたちは、例年より、7月の授業にじっくりと取り組むことができた。
13	7月の学校生活の充実度	子どもたちは、例年より7月の学校生活をゆとりとした気持ちで落ち着いて過ごすことができていた。
14	教育相談	子どもたちは、夏休み前に全員を対象とした教育相談を行うことで、落ち着いて学校生活を送ることができていた。
15		子どもたちは、夏休み前に全員を対象とした教育相談を行うことで、夏休み前や夏休み中の過ごし方を考えることができていた。
16	学びの連続性を意識した指導	夏休みが前後に含まれることで、子どもたちの夏休み中の学習意欲や学習の内容はこれまでより高まっていた。
17		子どもたちは、7月までの自分の学習状況を考慮しながら夏休みの学習計画を立てることができていた。
18	家庭訪問・夏休みの過ごし方	子どもたちは、家庭訪問での話し合いを夏休みの過ごし方に生かし、充実した生活を送っていた。
19	運動会・教育実習	子どもたちは、夏休みが1週間早く終わったことで、運動会練習にじっくりと取り組んだり、教育実習生を迎える心構えをつくったりすることができていた。
20	前期末の授業の充実度	子どもたちは、運動会や教育実習を終えて迎えた前期末は、例年の学期末よりじっくりと学習に取り組み、落ち着いた生活ができていた。

必要がある。

Ⅳ 二学期制試行1年目の成果と課題

二学期制試行1年目を総括的に振り返ると、次のような成果と課題が挙げられる。

1 ゆとりある教育活動の展開による学習指導や体験的な活動の充実について

- 始業式・終業式、長期休業の見直し等によって授業時数を確保することができたことにより、学習活動をこれまでより充実させることができた。特に体験活動については、多様な活動にじっくりと取り組ませる上で二学期制の効果があつた。
- 授業時数にゆとりが生まれたことにより、児童会活動として異年齢集団での触れ合い活動「チャレンジタイム」を新設することができた。そのことにより教師と子ども、また子ども同士のよりよい人間関係づくりにつながっていた。
- 生み出した時間的・心的なゆとりを生かして教育活動の充実を図るためには、子ども・教師ともに二学期制による学校生活リズムを定着させるとともに、カリキュラムを二学期制のものに整備していくことが大切である。



【写真3 チャレンジタイム】

2 「学びの連続性」の確保について

- 一つの学期が長期化し、また学期の途中に長期休業が入ることにより、技能の習熟に時間を要する学習内容や長期的な観察や調査活動を必要とする学習内容について深まりが見られた。特に、長期休業を効果的に利用して技能を高めたり、学期前半の学習を発展させながら自由研

究に取り組んだりする子どもの姿が多く見られたことは、二学期制の大きな成果である。

- 本年度は「学びの連続性」の確保の観点からもカリキュラムの見直しを各教科等で進めることができたので、さらに来年度はその運用を図りながら、さらなる工夫・改善を図っていく必要がある。その際、各教科等における評価の時期についても明確にしながらか進めていきたい。
- 3 個に応じたきめ細かな指導の充実について
 - 7月と学年末にすべての子どもを対象に教育相談を行うことで、教師と子どもがじっくりと語り合うことができ、個々の子どもの学習や生活状況を十分に見取りながら指導に生かすことができた。
 - 保護者に対しては、夏季休業中にこれまでより長く時間を取って家庭訪問を実施したり、12月に全保護者を対象とした教育相談を実施したりするなど、個に応じた学習・生活状況や新たな取組等の説明に努めた。このことで、保護者の通知表の回数が減ることや学力への不安感を軽減することができた。
 - 子どもや保護者に対して引き続き、一つの学期が長期化し、長期休業を学期途中に挟むことのよさを生かした学習の進め方について発信していく必要がある。そのためにも、教師は一人一人の子どもの学びをしっかりと見取り、子どもとじっくり向き合い、一人一人のよさを発揮させるような指導に努めていきたい。